



日本最古の閘門式運河？ 高梁川の高瀬通し

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

素

敵な倉敷美観地区はすぐ近くなのに、どうして数キロも離れた昔の運河跡を見に行かないか。なるほど、同行者の言い分はよくわかる。よって私は同行者を高梁川沿いのショッピングモール前に置き去りにして、対岸へ渡るために三キロほど離れた船穂橋へ向かって走ることにした。なぜならば、適当な交通機関がないからであり、急いだのは慣れない土地で同行者を独りにするからだ。「高瀬通し」は、岡山県三大河川の一つ高梁川の下流域にある堅盤谷から取水し、高梁川右岸を玉島港へと通じる全長約一〇キロの灌漑用水路であり、かつては高瀬舟が通船する運河でもあった。だから「高瀬通し」という。

堅盤谷にある取水口は「一ノ口」といい、高さ約八・四メートルもある巨大な石造の水門の上に、江戸時代のものと思われる水門小屋が建てられている。この一ノ口の下流約三五〇メートルに「二ノ口」水門があり、高瀬通しはこの二つの水門とその間が閘室だった閘門式運河と地元では伝えられている。閘門とは、二つの水門を巧みに開閉することにより、水位差を調節して舟を通す施設のことだが、高瀬通しが閘門式運河だとすれば、完成は延宝二年（一六七四）頃と推論されていることから、延宝七年（一六七九）に完

成した同県倉敷安川の吉井水門になりかわり、日本現存最古の閘門式運河となる。

さて、船穂橋を渡ると、すぐに高瀬通しの水路に行きあった。現在でも灌漑用水路としては機能しているが、川からの取水はサイフォンで一ノ口の足元から湧き出るようになっており、水門は閉鎖されている。しかも水路にはコンクリートの小橋がいくつも架かっている。実際に通船して閘門式運河としての機能を見定めることはできない。

しかも、研究者からは否定的な意見が出ている。たとえば一ノ口と二ノ口の間が約三五〇メートルと長いことから、この区間で水位調整すると、多量の水が水路を流れて危険だという。

また岡山大学の馬場俊介教授は、「二種の閘門ではあるが」とした上で、やはり「長さ三五〇メートルもある閘室はあまりに非現実的で、一ノ口と二ノ口の交互開閉で水位調整を行っていた可能性は考えられない。むしろ、二基の不連続に配置された水門が、京都の高瀬川に造られた流量調整用の水門のように、取入口付近の急な流れを調整してただけのように思える」として、本格的な閘門式運河だったか確たる証拠はないと結んでいる。結局のところ、新しい史料でも発見されないかぎり、高瀬通しが現

存最古の地位に浮上する術はない。

先に倉敷美観地区に入っていた同行者と合流すれば、どこも混んでいて昼飯が食えなかったと、グツグツとつぶやいていた。案の定だ。とりあえず、店頭で串揚げと缶ビールを買って与えようと、みるみる元気を取り戻してきた。簡単な人だ。単純な構造だ。そうだが、小さな子どもってこんな感じだ。うまい、うまいと喜んで食う同行者は、もはやわが子のようなだった。



高瀬通しの一ノ口水門

[交通] JR山陽本線 西阿知駅から徒歩約1時間